水戸の一日

露口卓也

旅行はあまり好きではない、というより敬遠したい方である。前号の沖田行司氏の出雲紀行は旅先ゆえの気楽さと緊張感とがゼミ学生との間にほんのりと流れていて、いかにも旅を楽しんでいる様がうかがえる。氏自身の旅を満喫する心持が文章に反映しているのであろう。うらやましく思う。私の場合ならまずこうはゆかない。旅行は苦行でさえある。理由はいくつかあるが、何よりも致命的なのは乗り物に弱いことである。幼少より平衡感覚に欠損があり、乗り心地の良いバスや車では必ずといってよいほどに乗り心地が悪くなる。とくに船は最悪である。念の為に申し上げれば飛行機は今もって利用したことなく、できうれば一生乗りたくないと思っている。郷里であった徳島への船旅は苦しきことのみ多く、船中三時間余をトイレで過すこととしば〳〵であった。我ながら情けなく思うが、これは如何ともなしがたい。ここ四、五年で余程マシになったが、旅を楽しむ心境には程遠い。

こういうわけで、昨夏の水戸行のように一人旅ともなると、わずか三泊四日であっても、極度に緊張しているわけで、行動半径は必然的に直線的になってしまう。したがって、旅行といっても味気ないもので、ましてや歴史散歩という悠長なものでもなかったが、水戸でのテンヤワンヤの一日を紹介することでお茶をにごすことになる。

水戸駅に降り立ってみて、まず気付くのは駅周辺部が見事に都市的整備をされていることである。殊に駅北側は幅五〇～三〇メートル位の道路がほゞ直線に伸びていて、その道筋に商店、ホテル、銀行などの高層ビルが凡そ一キロ以上にわたって林立していた。聞けば六〇年代に大型小売店が大量に進出してきたとか。江戸時代の城下町図によれば、このあたりは城郭と武家屋敷地にあたるが、城下町特有の屈曲路は全くといってよい程に跡形もない。水戸城は那珂川と千波湖に挟まれた台地にあったが、常磐線が城域の一角を貫ぬき、千波湖は大半埋立てられ、水戸城下町は大きく変貌した。水戸黄門に今日の水戸をみせたら目を白黒させて、きっと例の高笑いをするのではなかろうか、と思ったりなどした。

さて水戸での最初の行動はホテルへの直行(?)である。塒(ねぐら)を確認しておかないと不安で

たまらないからである。予約を確かめ荷物を預け、目的地の彰考館に行くためタクシーを呼んでもらった。車に乗り込み行先を告げると、「ショウコウカン(?)商工会議所ですか」というではないか、私はあわてて、「イヤそうじゃなくて彰考館です」と言い直すと、「ショウコウカン(?)」、依然分らぬ様子、これにはあわてるとともに驚いた。水戸藩といえば『大日本史』、『大日本史』といえば彰考館と思っていた私は、まさか地元の人がその所在を知らないなどとは考えもしなかった。そこでホテルにあった観光パンフをみてみると、何とそれにも彰考館は記載されていない。再びフロントで聞くとやはり知らないとの返事、仕方なく預けた荷物から住所を記したノートを取り出してみせると、フロント氏曰く、「ああ徳川博物館ですね」というので、タクシーに戻って告げると、「わかりました」と明快な返事があり、やっと発車となった。車中での気持の混乱を何と形容していいか分らないが、不安感のボルテージが相当に高まっていたことだけは確かである。途中、幅広い快適な道路から見えた千波湖は美しかったが、果してどれ程正確なことか。ゲートをくぐり車から降され周囲をみると、りっぱな現代建築物と休憩室があり、行ってみるとそれが徳川博物館で彰考館の所在を尋ねると少し奥にあるとのこと、早速その方向に進むと明治建築風の洋館と鉄筋コンクリート造の蔵と平屋があるのみで、彰考館らしい建物も看板も見当らないのでウロウロしたが（看板は後日に見つけた）、結局、該当するのはやや古ぼけた平屋しかないので訪うと、そこが彰考館だと言う。地元の人が知らないのも成程と納得させられるとともに、イメージしていた彰考館と眼前の建物との落差にすっかりとまどってしまった。

彰考館は二代藩主光圀によって歴史書編纂の目的で設けられ、はじめは江戸に、後に水戸城中にも置き（九代斉昭のとき水戸史館に統一）、相当の規模で活動していた。明治維新後は場所も転々としたが、明治三九年（一九〇六）、二五〇年をかけた『大日本史』が完成するとともに閉館した。その後は彰考館文庫として七万冊余の蔵書を保管していたが戦災でその多くを失い、昭和三八年現在の場所に移され今日に至っている、という沿革はあらかじめ承知してはいたが、一時は五〇をこえる人員を擁した彰考館の規模からすればどうしても落差を感ぜずにはおれない。彰考館員であった助さん（佐々宗淳）や格さん（安積覚）はどう思うことだろう。

入館して今回の調査目的である写本を手にしたときにはさすがにホッとした。そこでザッと目を通し複写希望を申し出たところ、「これ全部（全二〇冊あった）ですか。まず無理でしょ」「部分的ならいいんですか」「それもどうですかなあ。どちらからお越しですか」「京都です」「遠くからご苦労です。この前も東北の方から」云々、このあと数分間話が外れ「では申請だけしてみたらどうです」「そうします。いつごろ結果が分りますか」「我々が必要書類を添付してトノサマに許可をもらうのですが、いまトノサマは東京ですから、まあ一ケ月ぐらいですか。トノサマは多忙で、少し身体の調子を崩しておられるので」云々、以後また話が外れてしまい、結局、あまり希望をもたず申請書を提出した（後日やはり却下された）。

トノサマ――いまや時代劇でしか使われない言葉に出合って少々面くらった。考えてみれば彰考館は水戸徳川家の書庫であり、広い

徳川家の所有地のなかにあるのだから、管理・事務の担当者が執事的意識を有していても不思議ではないし、トノサマという用語はきっと水戸以外でも生きているだろう。現在の当主は初代頼房以来一四代目にあたる。現当主にとって光圀や斉昭のいた水戸徳川家の歴史は相当に重い。御三家、尊王攘夷、幕末の悲惨な藩内抗争、どれをとってもシンドイばかりである。それは彰考館が市街地から離れ田園風景のなかに位置するところに象徴されている。時代と一定の距離をおきながら、しかもドッカリと根を下して立っている様である。トノサマはその端的な表出である。というようなことを思いながら写本をくっていると閉館時間となった。

次の訪問先はN氏宅であった。N氏の祖父？は水戸藩士で高名な学者であり、N氏自身も数多の著作がある。初めてお会いしたが応対はきわめて叮嚀であった。その態度は吉田松陰が水戸を訪うたときの「水府の風、他邦人に接するに、欵待すること甚だ渥く、歓然として交欣し、心胸を吐露して隠匿する所なし」という印象に近い。茶果のもてなしをうけたが、菓子名が大日本史とあった。話は自然と水戸学のことになった。N氏の考え方は、光圀や藤田東湖など水戸学派の歴史認識をモデルとして、それを日本精神へと普辺化しようとすることに基本がある。ずいぶんと考え方に開きがあるので話は必ずしもはずまなかったが、少くとも幕末の水戸学はきちんと歴史のなかに位置づけられる必要があると考えていたので、この点に関しては多少とも意見交換ができた。ただN氏の水戸学に対する熱き思いだけは感得しえた。とともに、こういう人には現代は必ずしも住み心地良くはなかろうとも思った。また、逆に水戸学が近代以後も——というより近代以後にこそ一層はっきりと生きていることを思い知らされた。

ホテルへの帰路、今日一日のドタバタを思い返しつつ、水戸駅前のみごとな都市的変貌と、森閑とした土地にポツリとある彰考館・水戸学復興に熱情をもやす高齢の学者、この二重性が際立って印象付けられた一日であった。

もっともまだ一日は終っていない。最後にホテルについて一言。ホテルといってもビジネスで料金は安い。フロ付だからこの宿では高い方ではあったが、部屋に入ってみてすぐに値段通りであることが分った。狭いし壁は黒ずみ、シーツには薄いシミが付いている。フロ場をのぞくと何とトイレがない。どうやら外にあるらしい。枕がちがうと寝付きが悪いから余り飲めないアルコールを多い目に入れ、寝付いたまではよいが、夜中に当然のごとく尿意を催す、トイレは外だから鍵をもって出掛けるが、生憎目的地は遠く、部屋に帰ったときはすっかり眼がさめ、とうとう明け方まで寝付けず大弱りであった。二日目からこの事態にどのように対処したかはご想像に任せるとして、安いビジネスに泊るときはトイレの有無にご注意を。ともあれ、これにて水戸の一日がやっと終ったことになる。

（大学文学部専任講師）